

「日本語の曖昧な表現」

中日本自動車短期大学 タパリヤ リタ(ネパール出身)



日本に来てから 3年が経ちました。この 3年間を振り返ると、本当にさまざまな経験をしてきました。その中でも特に印象に残っているのは、今でも理解が難しいと感じる「日本語の曖昧な表現」です。日本語では、同じ言葉でも場面や言い方によって意味が変わることがよくあります。そのため、私は何度も誤解してしまうことがありました。

例えば、日本に来たばかりの頃、初めてのアルバイトで接客をしていた時、お客様に「袋はご利用ですか?」と聞いたところ、そのお客様は「大丈夫」と言われました。私は「いる」という意味だと思い、商品を袋に入れようとしたところ、お客様が怒った顔で「いらない」と言われました。その時、初めて「大丈夫」は否定の意味で使われることがあるのだと知りました。ところが、次に同じ場面で別のお客様に「大丈夫です」と言わされた時、袋なしで会計をしたら、「袋に入れてください」と言われ私は戸惑いましたが、日本人の方に聞いたところ、そんな時はお客様の表情や反応を見て、その人が本当に言いたいことを理解する必要があると言われました。母国では「いる」「いらない」ははっきり言うので、どうして日本ではこんなに分かりづらい言い方をするのだろうと思いました。また、日本語学校で勉強していた時、海外に留学した経験のある日本人の女性が、アルバイト先の店長にデートに誘われた際に「考えさせてください」と言って断ったという話を聞きました。この「考えさせてください」という言い回しは、日本では「ダメ」という意味を含んでいて、ソフトな断り方だとその時学びましたが、私の母国ではこうした言い回しはありません。さらにある日、日本語学校で宿題を出した時、先生が「すみません」と言われ、私はどうして先生が謝っているのかと驚きました。しかし後で聞いてみると、「すみません」は「感謝の表現」や「謝罪の表現」、さらには「呼びかけの表現」としても使われることが分かりました。このように「すみません」にはいくつかの意味があると知った時は驚きました。

また、バイト先で忙しくて疲れていた時、店長に「水飲みますか?」と聞いたら「いいよ、ありがとう」と言われました。私はその後、水を持っていこうとしたら、「要らないと言ったのに」と言われてしまいました。このように、日本語に慣れていない外国人にとって、曖昧な言い回しは本当にわかりづらいものです。「大丈夫」「いいよ」といった言葉の意味が、イエスなのかノーなのか、正確に理解するのは難しいです。この他にも、日常会話の中で分かりづらい曖昧な表現がたくさんあります。このような曖昧さに悩んで、接客時に相手の言ったことがうまく理解できず、お客様とのコミュニケーションがうまくいかないこともありました。最悪の場合、意味がよく分からぬまま「はい、分かりました」と言ってしまい、その後さらに混乱して落ち込むこともよくありました。

それでも、私はもっと頑張ればきっと理解できると思い、毎日日本人に話しかけたり、色々なことを聞いたりして努力を続けました。その結果、数ヶ月後には日本語が上達し、曖昧な表現の理解度も高くなりました。こうした経験を通じて、日本では「相手の気持ちを尊重するためのコミュニケーション」がとても大切で、そのため曖昧な表現が使われるのだということが、少しずつ理解できるようになりました。

この 3年間は私にとって日本語の曖昧な表現を学ぶ貴重な時間でした。これからも、まだまだ理解できない日本語の表現が出てくると思いますが、文法や語彙だけでなく、曖昧さやその背後にある文化的な背景を理解し、柔軟に使いこなす力を身につけたいと思います。日常生活の中で日本語を積極的に使い、様々な表現に触れて練習を重ね、文脈に応じた適切な表現ができるようになりたいです。そして、日本人との交流を通じて、これからも日本語の学びを深めていきたいと思っています。

※原文表記のまま掲載しています。

「大切なものの」

中日本自動車短期大学 ヤン パイ ソウ (ミャンマー出身)



大切なものは人それぞれだと思います。家族、友達、恋人、あるいは左の薬指に付けられたリングや、好きな女の子の目を引くために鍛え上げた筋肉など、その内容は実にさまざまです。もし「あなたにとって一番大切なものは何ですか？」と突然聞かれても、すぐには答えられない人も多いでしょう。大切なものは、人生の段階によって変わっていくものだと思います。

私にとって大切なものは、父からもらったスマートフォンです。スマートフォンと聞くと、多くの人は「ただの道具」と感じるかもしれません。しかし、私にとってそれは単なるガジェットではなく、深い意味を持つ特別な存在なのです。

私がこのスマートフォンを手にしたのは、数年前のことです。当時、私はミャンマーの大学2年生で、友達のほとんどがすでに自分のスマートフォンを持っていました。みんなはSNSでつながり、自由に連絡を取り合い、楽しそうにしていました。一方で私はスマートフォンを持っておらず、少し孤独感を抱いていたのを覚えています。自分が取り残されているような気がして、内心スマートフォンが欲しくてたまりませんでした。

しかし、私の家は決して裕福ではなく、父も長時間働いて家計を支えていました。父にスマートフォンを買ってほしいとは思っていましたが、それは無理だろうとあきらめかけており、自分の力でいつか買おうと心に決めていました。そのため、父に直接お願いしたことは一度もありませんでした。

ところが、私の誕生日が近づいたある日、父が突然「これ、お前にだ」と小さな箱を手渡してくれました。驚きと喜びで胸がいっぱいになりました。箱を開けると、中にはスマートフォンが入っていました。それは最新のモデルではなく、少し古い機種でした。そのとき父はこう言いました。「これは新しいものじゃないけど、これでお前も友達ともっとつながれるだろう。お前がずっとスマホを欲しがっているのは知っていた。少しずつ貯金してこれを買ったんだよ。」その言葉を聞いて、私は父の深い愛情を感じました。父は、私が何も言わなくても気づいてくれていて、自分の楽しみや贅沢を犠牲にして、私のためにお金を貯めてくれたのです。

そのとき私は、スマートフォンそのものが大切なのではなく、その背景にある父の思いや努力こそが本当に大切なだと気づきました。このスマートフォンは、単なる連絡手段や情報を得るための道具を超えて、父の愛の象徴となりました。

日本に来た今でも、毎日このスマートフォンを使うたびに父のことを思い出します。どんなに忙しくても、私のことを気にかけてくれるその心が、何よりも価値あるものだと感じています。

父が私に与えてくれたのは、ただのスマートフォンではありません。それは思いやりと家族の愛、そして人と人とのつながりの大切さです。このスマートフォンをもらったことをきっかけに、私は父とのコミュニケーションをより大切にするようになりました。

私たちが持っているモノの価値は、価格や見た目だけで決まるものではありません。そこに込められた思いやストーリーこそが、そのモノを特別なものにしているのです。

父からもらったスマートフォンが私にとってかけがえのない存在であるように、皆さんにもそれぞれの「大切なもの」があるはずです。どうか、その大切なものを、いつまでも大事にしてください。

※原文表記のまま掲載しています。